

# 五十年前の日暮

木村 咲

団地住まいを始めた頃に文章教室に入れてもらって、明日は教室の皆さんと雷山散策に行くことになり、お弁当の用意に牛蒡を洗い細く切り、火にかけました。

昨日までの抜けるような青空はどこへやら、時折り厚い雲が影を落とし、三階の我家の窓から見下ろす樹木の梢が大きく揺れています。どこからかモズの鳴き声が聞えてきます。

明日の天気が気になり、南側のペランダに出てみました。ガスの火を細くするのは忘れません。

見下ろした庭の芝生は刈り込まれたばかりで、青い平らな草原は美しく整って気持ちよく眺められ、三棟の梅の樹と桜の幼木、六千ボルトの電柱。今年の酷暑にも元気だったウメモドキが、びっしり赤い実を付け、その端々に葉をのぞかせています。カイズカイブキは道路と

団地の庭との境界線で十四棟をすっきり囲っています。

その庭を見回して、鍋の牛蒡と火を確かめ、またペランダに出ました。道の向こうはビルの谷間に残った田が五反。三反は昨日までに刈り取りが終わり、コンバインでしようかビニールでしっかり覆われています。

空き地になった三反の、まだ稲藁のある地面に、子供達が遊んでいます。ドッチボール組の大きな子が六人。

ソフトボール組の一年生ぐらいの男女が六人。キャッチボール組はもつと小さい子八人。藁くずを集めて投げたり、山をつくったりしている女の子もいます。

四月、小田部小学校が新設されたのと同時期に設置された信号機が、青になりました。そのすぐ左側にダンブが土を出入していた広い土地にはビルが建設中で、七階ほどの高さにビニールシートで覆われ、西方の空を半分

---

隠して見えません。

あかね色に染まっていた昨日と違って、雲のすき間から白金色の冷たい光が線を引き、空の輝きも淡くなり、風も冷たくなってきました。ボール投げや藁くず遊びに飽きたのか、どの子も藁くず合戦。かき集めては抱え、走っては投げしています。

明るいうちから顔を見せていた三日月は昨日より一段と高い位置になって、交差した電線の上に淡黄色をして浮かんでいます。

一人、二人と帰っていき、六人になり四人になり、その四人もボールを追って帰って行きました。あの子たち、今夜のお風呂では藁ですれた首筋がヒリヒリするだろうな……。

一時間半かかって子供達を眺め、鍋を気にしていた牛蒡もすっかり味がしみて、明日の用意も整いました。